

インドネシア語へのマンガ翻訳の挑戦

筑波大学大学院国際日本研究専攻

イドゥルス

1990年代初頭に翻訳されて出版されて以来、日本のマンガはインドネシアのコミック読者から注目を集めるようになった。以前は翻訳されたマンガは特定のファンにしか知られておらず、限られた人だけが読んでいたが、現在では子どもから大人まで、性別を問わず誰もが楽しむものとなっている。現在では、Elex Media Komputindo、M&C、Mizanといったインドネシアの出版社が発行する印刷版に加えて、MangaToon や LINE Webtoon、その他のコミックサイトなどのプラットフォームを通じて、さまざまな翻訳マンガをデジタル版でも簡単に見つけられるようになっている。

マンガはただの娯楽ではなく、文化的な価値や学びの要素も豊富に含まれたメディアである。マンガのインドネシア語翻訳は、日本とインドネシアの文化をつなぐ架け橋となるプロセスである。とはいえ、言語構造の違いといった言葉の壁から、ストーリーの意味やニュアンスに影響を及ぼす文化の違いまで、そのプロセスにはいくつもの課題がある。加えて、テキストの配置や言葉の使い方などの技術的な点も、翻訳者が考慮すべき重要なポイントとなっている。

マンガを日本語からインドネシア語に翻訳する過程では、言語に関する課題が特に大きなポイントとなる。その大きな要因のひとつは、日本語とインドネシア語の文の構造が異なることにある。日本語の文は『主語→目的語→動詞』の順（SOV）で作られるのに対して、インドネシア語は『主語→動詞→目的語』（SVO）の順になる。この違いによって、翻訳者は翻訳した言葉の流れやスタイルを崩さずに、きちんと意味を伝えるために文章を正確に理解する必要がある。また、マンガの敬語やキャラクターごとの話し方も、翻訳の際に難しい点となる。日本語には複雑な敬語があり、登場人物の年齢や社会的地位、性格、または彼らの関係性に応じた話し方がいくつもある。原作のニュアンスを大切にしつつ、これらの要素をインドネシア語に訳すには、翻訳者の創造力と日本とインドネシアの文化への深い理解が求められる。

マンガ翻訳における文化的な問題も、言語的な問題と同様に非常に複雑である。主な問題の一つは、伝統的な祭りや食文化、教育制度など、インドネシアとは異なる日本特有のローカルな言及が多く含まれている点である。これらの文化的な言及は、日本の読者には大切な意味を持つが、うまく伝えなければ、インドネシアの読者には分かりづらく、混乱することがある。翻訳者はまた、原文の文化を適応させるべきか、それとも原作のまま伝えるべきかというジレンマに直面する。一方で、インドネシアの読者が内容を理解しやすくするためには「翻案」が求められるが、過度に手を加えると、マンガの魅力である日本文化の特徴が失われるおそれがある。そのため、原作に忠実でありつつ、インドネシアの読者も楽しめる翻訳にするためには、慎重な配慮が欠かせない。

マンガ翻訳の視覚的・技術的な課題は、読者が気づかないことが多い側面である。視覚的な要素は、マンガを読むときの品質や快適さを保つために重要な役割を果たす。マンガ翻訳における主な視覚的・技術的な課題の一つは、吹き出し内のテキストの配置やページレイアウトの調整である。日本のマンガは、イラストを邪魔せず、限られたスペースに文字を均等に配置する独特のビジュアルスタイルを持っている。翻訳者とグラフィック・エディターは、翻訳されたテキストが読みやすく、文脈を守り、画像の美しさを壊さないように協力し合わなければならない。

日本のマンガの縦書き（上から下へ）の形式は、横書き（左から右へ）に慣れているインドネシアの読者にとって技術的な課題を生むことがある。読み方向を無理に変更すると、視覚的な流れが乱れ、コマの順序が混乱する恐れがある。一方、元の縦書き形式を保つ場合、読者は新しい読み方に慣れる必要があり、理解力が求められることになる。そのため、出版社は読者に縦書き形式を受け入れさせるか、または現地の習慣に合わせて横書きに変更するかを慎重に決める必要がある。この決定は単なる技術的な問題ではなく、作品の文化的な純粋性や読者の読書体験に深く関わる重要な選択である。

さらに、効果音（オノマトペ）の翻訳は、特に挑戦的な課題である。というのも、これらのオノマトペはイラストと密接に結びついており、単なる付加物ではなく、物語の雰囲気や感情表現を強調する重要な役割を果たしているからである。オノマトペをインドネシア語に変える作業は、複雑なグラフィック編集が求められ、時にはビジュアルの一部を再描画する必要があるため、技術的にとても難しい。しかし、オノマトペを説明なしで日本語のまま残すと、読者がシーンの文脈を誤解する可能性があるという問題が生じる。

マンガ翻訳は、若者の視野を広げる上で重要な役割を果たす。グローバル化が進んだ現代において、マンガは日本文化を知るための窓口となり、異なる文化的視点を提供する貴重な媒体である。従来の書籍とは異なる多様なストーリー展開や表現スタイルに触れることで、読者は自然に新しい物語の構造を受け入れるようになる。このような経験は、読者の文化的理解を深め、視野を広げるだけでなく、さまざまな視点から考える力や感受性を育む。特にデジタルネイティブ世代にとって、マンガ翻訳は単なる言語学習にとどまらず、知的・情緒的な成長を促す重要な教育ツールとなる。

マンガ翻訳は大きな課題を抱えつつも、文化的、教育的、さらには経済的な可能性を秘めている。これらの課題に対応するためには、いくつかの方策が考えられる。まず、マンガ翻訳者は言語や文化の壁を越えるために、専門的なトレーニングを受けるべきだ。次に、出版社は日本文化に詳しい編集者と連携し、より正確で質の高い翻訳を目指すべきだろう。さらに、読者に公式翻訳の重要性を理解してもらうことも大切だ。マンガ翻訳は単なる言葉の置き換えではなく、二つの文化をつなぐ架け橋でもある。翻訳者は言語間の意味やニュアンスを伝え、原作の情感を込めて物語を再構築するという点で、原作者に匹敵するほど重要な役割を担っている。